

第14問 法定地上権に関する次のアからオまでの記述のうち、判例の趣旨に照らし正しいものの組合せは、後記1から5までのうち、どれか。

ア 甲土地を所有するAが、甲土地にあるB所有の乙建物をBから買い受けた後、その旨の登記がされないまま、Aが甲土地に抵当権を設定した場合において、抵当権の実行によりCが甲土地の所有権を取得したときは、法定地上権は成立しない。

イ A所有の甲土地にBのために第1順位の抵当権が設定された後、甲土地にA所有の乙建物が建築され、次いで、甲土地にCのために第2順位の抵当権が設定された場合において、第2順位の抵当権の実行によりDが甲土地の所有権を取得したときは、Bが乙建物の建築を承認していたときであっても、法定地上権は成立しない。

ウ A所有の甲土地にあるB所有の乙建物にCのために第1順位の抵当権が設定された後、BがAから甲土地を買い受け、次いで、乙建物にDのために第2順位の抵当権が設定された場合において、第1順位の抵当権の実行によりEが乙建物の所有権を取得したときは、法定地上権は成立しない。

エ A所有の甲土地にA及びB共有の乙建物がある場合において、Aが甲土地に抵当権を設定し、抵当権の実行によりCが甲土地の所有権を取得したときは、法定地上権は成立しない。

オ A所有の甲土地にA所有の乙建物がある場合において、Aが甲土地及び乙建物に共同抵当権を設定した後、乙建物が取り壊され、次いで、Aから甲土地を賃借したBが甲土地にB所有の丙建物を建築した後、抵当権の実行によりCが甲土地の所有権を取得したときは、法定地上権は成立しない。

1 アウ 2 アエ 3 イウ 4 イオ 5 エオ

民法：30
第14問

法定地上権

法定地上権に関する次のアからオまでの記述のうち、判例の趣旨に照らし正しいものの組合せは、後記1から5までのうち、どれか。

ア 同一の所有者に属する土地及びその土地上の建物に共同抵当権が設定された後、当該建物が取り壊され、その後、当該土地を賃借した者が新たに建物を建築した場合において、当該土地についての抵当権が実行され、第三者が当該土地を買い受けたときは、新建物のために法定地上権が成立する。

イ 更地である土地の所有者が、土地に1番抵当権を設定した後、当該土地に建物を建築し、さらに、当該土地に2番抵当権を設定した場合において、2番抵当権が実行され、第三者が当該土地を買い受けたときは、1番抵当権設定当時、1番抵当権者が土地所有者による建物の建築を承認していたとしても、建物のために法定地上権は成立しない。

ウ A及びBが、甲土地及びその土地上の乙建物をそれぞれ共有していたところ、甲土地のAの共有持分に抵当権が設定された場合において、その後、当該抵当権が実行され、Cが当該持分を買い受けたときは、乙建物のために法定地上権が成立する。

エ 地上建物に仮差押えがされ、その後、当該仮差押えが本執行に移行してされた強制競売手続における売却により買受人がその所有権を取得した場合において、土地及び地上建物が当該仮差押えの時点で同一の所有者に属していたものの、その後に土地が第三者に譲渡された結果、当該強制競売手続における差押えの時点では土地及び地上建物が同一の所有者に属していなかったときは、法定地上権は成立しない。

オ 土地及びその土地上の建物の所有者が同一である場合において、土地の登記名義が前所有者のままであったとしても、建物に抵当権が設定され、その抵当権の実行により第三者が建物を買い受けたときは、建物のために法定地上権が成立する。

※関連論点

1 アウ 2 アエ 3 イウ 4 イオ 5 エオ